

第二十二弾

世話役トリオの町内練り歩き編

# 赤いすば たのびば 標り町



他人ながら、血をわけた兄弟のようでもあり、家族のようでもあり、ライバルであり同志であり…。この町の人々はあったかい関係にある。



**谷村弘二 (39歳)**  
昭和28年米沢市に生れる。同志社大学文学部卒業後、ベルル株に入社。代表取締役。

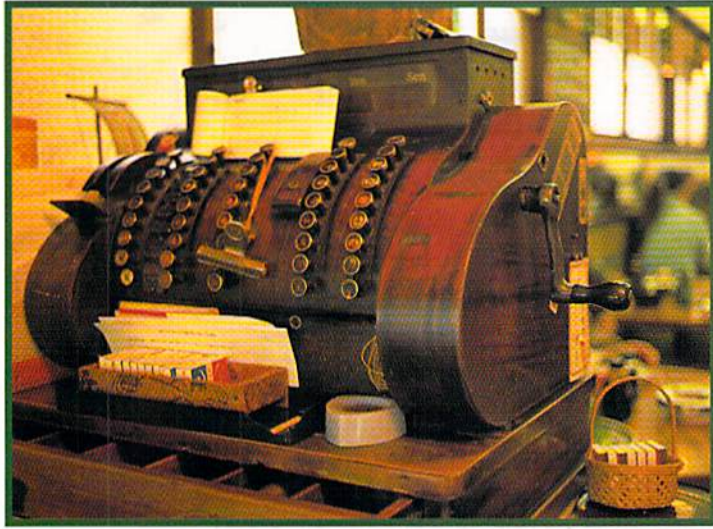


**井上恭宏 (38歳)**  
昭和30年、京都にて生れる。日本大学芸術学部卒業後、株左り馬に入社。専務取締役。



**野澤正裕 (37歳)**  
昭和31年京都に生れる。大阪学院大学商学部卒業後、株野澤屋に入社。専務取締役。





スタンドにある年代物のレジスターはまだ現役の品。ガチャンの音が良い。



スタンドの主人・杉山貞之さんも映画作りに参加した一員です。

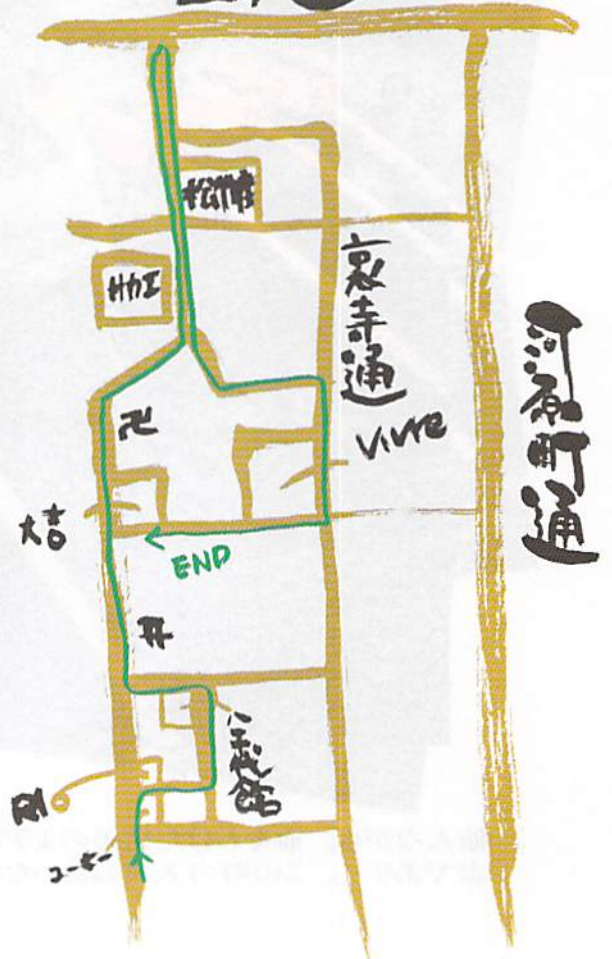


泣く子もガキ大将も黙ったという阪本漢方の看板はなにやらいわくありげ。



スタンドにて源久秀刃物店の主人とばったり。「あとで店寄るわ」

## 三栄通



まだ来ぬ春を待ちわびて はらはらと散る花小雪。暦のうえではとつくに春なのに、ちっとも暖かくなる気配のないそんなある日。えい、これまでよ！とばかりに吹きおさめ、飛びきりつめた風が吹いた。花びらのような小雪までをお供にして。「まるで春の風やねえ、だれもかれも時ならぬ寒さにコートをはおり、襟をすぼめながらアーケードの中へ足早に入っていく。新京極は、明治5年社寺の境内を開発して新たに生まれた街で、昭和30年代に入ってからアーケードが完成。100年以上にわたって親しまれてきた繁華街だ。

「エライお天気になりましたなあ」化粧品を幅広く扱う「左り馬」の専務・井上恭宏さんは歌舞伎役者のような面だちの眉間にしわをよせて寒がった。こんな日にはまず腹ごしらえ。少し南下がり、昔懐かしいレトロの香りがぶんぶんする食堂「スタンド」へ。店内にはかなりの数のメニューがありとあらゆるところに掲げられており、実にあなたで賑やかな雰囲気。「おでんや柳川だ、ちゃんぽんだ、あまみず熱燗だ！」欠食児童よろしく次々に注文し慌ただしく平らげる。入れ替わり立ち替わり知り合いが入ってきて井上さんは挨拶に大忙し。「ああ毎度どうも」「おっ、やっちゃんやないかい。今日はどないしたん？」町内の顔役はなかなか大変や。

「腹もふくれたし、そろそろ谷ヤンとマーちゃんを迎えに行こか」蛸薬師通りを下がったところにあるブティック「ベル」のオーナー・谷ヤンこと谷村弘一さん、ななめ向いのおもちや屋「野澤屋」の専務・マーちゃんこと野澤正裕さんが合流。町内の世話役ヤングト









アーケードや地面のカラー舗装も今や2代目3代目。店の主人も2代目3代目の時代となり、通りの雰囲気もかなり若返ってきたようだ。

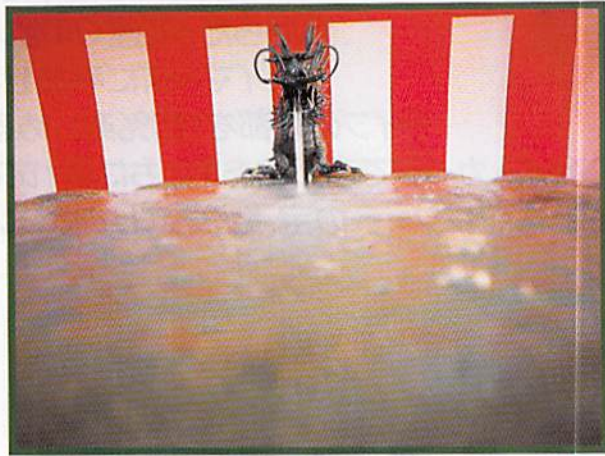
美松劇場と八千代館の南側にある新  
京極児童公園が町内の悪ガキたちの遊  
び場だった。キャッチボールや野球を  
しては、背中合わせに建つ錦天満宮の  
境内に飛び込んでしまったボールを探  
すのが大変だった。4、5年前、花月  
劇場がバツサージオとしてリニューア  
ルオープンしたのを期に、吉本興業や  
京都市などが協力して公園を整備。噴  
水を新設しライトアップもできるよう  
に工夫されたが、わずかな間に壊され  
てしまった。「みんなの善意だったのに、  
心無い人がいるのが悔しい」と三人は  
顔を曇らせた。

再び新京極に足をもどす。東側にあ  
る「源久秀刃物店」の前で三人は足を  
止めた。店主の久世芳弘さんとは大の  
仲良しだからだ。店内にはいたるところ  
に看板が掲げられ、ないものは見当  
たらないぐらいありとあらゆる刃物が  
展示されている。刃物選びのコツを聞  
いてみた。「刃物は道具ですから、使う  
人が自分自身で持ち味や使い心地を確  
かめんとあきませんで」と店主。包丁  
研ぎの腕も超一流で、毎晩遅くまで持  
ち込まれた包丁を研いでいるという働  
き者である。

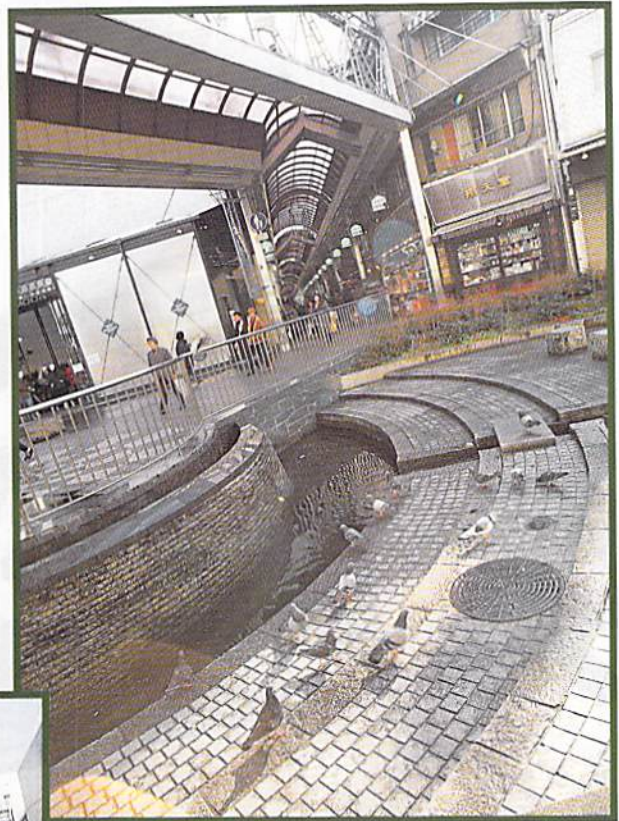
錦天満宮の境内に潭々と涌きだして  
いる地下水は京名水の一つとして有名  
だとか。水温は一年を通して常に17、  
18度、冬はあたたかく夏は冷たい不思  
議の水。無味無臭無菌とあって水をも  
らいに来る人が後を絶たないようだ。

「霞立つ 春米にけりと 此花を見  
るにぞ鳥の 声も待たる」と和泉式  
部が歌にまで詠んで愛した軒端の梅は、  
今も静かに誠心院に根を張っている。  
あまり訪れる人の少ない社であるのか、  
社殿の軒先に一羽の鳩が巣を作ってい  
た。まるで式部の想いを受け継いで梅





ボルノ専門の上映館である八千代館も古顔。映写室の窓から時計技師が顔をのぞかせる。



「堺特産打刃物切味は責任を以て保証仕候」と大きく書かれた看板は源商店の店内に堂々と掲げられている。



京都にはまだ宮大工が多いことから刃物の種類は豊富にしておく必要があるのだとか。それにしてもこの小さいカンナはどうだ / 微妙な曲線を出す時の必需品である。

を見守るかのようには。  
 三条通りを下がったところにある映画館・松竹座は三人にとって思い出深い劇場である。5年半前のこと。商店街のジュニアクラブのメンバー全員で映画を作ろうやないかという話を持ち上がった。「それはええ話や。やっちゃんは演劇プロデューサーになりたかったほどの人やったもんな。マーちゃんはおもしろいこと考えつくやろうし、谷ヤンはしっかりしてるからあの二人をきっちり面倒見てくれるやろ。あの三人を中心にしてやろやろ」、話は一気に盛り上がった。製作期間は丸5ヶ月、16mmで上映時間30分の大作。出演はメンバー全員でタイトルは「K・Y・O」。京都と新京極の。京、今日を引っかけてつけたのである。「僕とか谷ヤんはじめての経験やったからねえ、みんなの前で上映する時はドキドキしたよ」やんちゃやそんな顔をほころばせてマーちゃんが当時を思い出す。  
 「けど、おもしろかったよ。またやりたいよな」と三人の意見が一致。ということは、次回作がクランクインされるのもそう遠い日ではないのかも!? 気長に待つことにしよう。  
 小さな池に鳩が遊ぶ「ろつくんブラザ」から東へ、裏寺町を下がってみた。比較的小さな寺院がちらつらと続く。以前は寺の一角を使って算盤塾を開いていたところが多く、商売人の子どもはみな半ば強制的に通わされていた。今や町内に住む子ども数が少なくなると、経営が成り立たなくなってきたのか、塾は気配もない。寺や昔ながらの飲食店もひとつなくなり、ふたつ消え……。寺町どころかビル町になりかねない風情である。元気に走り回る子どもたちのかわりに、今は車が行き交っている。